

●自らの眼差しと、チェパンから著者への眼差しを交差させ、表象構築の双方向性を丹念に記述。「伝統文化」解釈への新たな地平を切り開いた注目の論考。

# 〈他者／自己〉表象の民族誌

## ネパール先住民チェパンのミクロ存在論

橘 健一 著

……近年の民族誌的な記述は、人類学が蓄積してきた神話や儀礼など文化のいわゆる伝統的要素の分析は切り捨てる傾向にあった。本書では、そうした文化の分析を批判的に継承するため、「ミクロ存在論」という分析枠組みを導入し、それによって多層的な象徴世界の記述を行い、「伝統文化」と民族、国家や開発との関わりの新たな歴史的な分析を試みた。……

グローバル化の進行や周辺地域の開発が進められる状況で、国家によって常に周縁化されてきた先住民が、いかに他者から表象され、逆に他者を表象し、自己を形成してきたのか。さらにそうした他者／自己表象の連鎖が、現実の社会関係にどのように反映されているのか。今後の国家や世界における先住民社会のあり方は開発にどう左右され、逆に開発の姿を変えるのか。本書は、そのような問いに導かれた民族誌的研究である。……

ただし、本書の民族誌的实践が、もし「非近代的先住民〈対〉近代化された私たち」や「かわいそうな人たち〈対〉そうではない私たち」という図式に陥るようなら、同時代的な共同性は開かれまいだろう。では、どのように民族誌を記述したら、そうした自己を優位なものとして他者を劣位なものとする、あるいはそれを逆転させた対立図式をゆるがすことができるのだろうか。

そのような問題意識と、チェパンにとっての他者と自己との複雑な関係を描き出す目的で、本書では通常の民族誌的記述とは異なる方法を採用した。それが「〈他者／自己〉表象」で、これは、私という他者に対するチェパンの人びとの表象、チェパンという他者に対する私の表象、チェパンの人びとによる他者の表象と自己表象からなる。その記述は他者と自己に対する表象を交差させながら、チェパンにとっての多様な他者と自己の姿を浮かび上がらせることになった。……（「はじめに」より）

はじめに

第一章 序論

第二章 チンランの象徴世界

一 チンラン

二 肉と狩猟

三 肉と結婚

四 系譜と所有

五 トンコロ

六 魂の旅

七 チンランとは何か

第三章 チョールの象徴世界

一 チョールと森

二 ラナ家の専制政治とチェパン

第四章 サールの象徴世界

一 学校のサール

二 官僚、政治家のサール

三 開発とサール

四 サールとチェパンの対置

第五章 ドウキの象徴世界

一 ドウキとは何か

二 出来事と日常の傾向

結論 チェパンとは何者か

一 チェパンのミクロ存在論

二 異文化解釈の世界と再会の世界

三 再会後の世界

あとがき

引用文献 索引

体裁

・A5判・上製カバー

・三四〇頁

税込み定価

・五二五〇円

(本体五〇〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一-四一九  
電話〇三(三)八二八)九二四九  
http://www.fukyo.co.jp

注 文 書	
流通センター取扱品	
発売	風響社 TEL: 03-3828-9249
橘 健一 著	税込み
〈他者／自己〉表象の民族誌	五二五〇円
ネパール先住民チェパンのミクロ存在論	部
ISBN978-4-89489-134-0 C3039 ¥5000E	

〔お客様控え〕

ご氏名  
ご住所

お電話

月 日